

学位論文題名

都市高齢者を支える福祉資源についての中日比較研究

— 家族福祉と地域福祉を中心として —

学位論文内容の要旨

本論文は、21世紀になって急速に進行する中国の高齢化を強く意識しながら、高齢者福祉について日本との比較の視点からの分析を試みたものである。そこでは、中国における高齢者に関する家族福祉と地域福祉を主体として、中国型高齢社会を考慮に入れた家族の現状と地域福祉の現状を、具体的な瀋陽市高齢者調査データに基づき考察が進められた。

まず高齢者の家族福祉に関しては、高齢者も家族福祉の担い手として機能することが事例調査によって明らかにされた。そして地域福祉の担い手でもある高齢者が、その自己実現欲求充足の場面でもある社区(コミュニティ)における社会参加とサービスの担い手であることを通して、地域福祉創造者にもなりえることが論証された。

さらに、家族福祉と地域福祉についての日本都市の先行研究の結果を準拠点とした比較研究が行われた。日本都市の事例はすべて指導教授である金子勇の先行研究成果を二次分析したものである。なぜなら、高齢化が国際的な基本的な動向である以上、家族福祉や地域福祉の比較研究により、各国それぞれの発展の特徴やパターンおよび差異を明らかにすることが望まれるからである。

特に、同じ北東アジア地域にありながら、単に経済の先進国であるだけではなく、その高齢社会問題でもすでに20年以上の経験がある日本の福祉の現状を中国と比較することは、中国の今後の高齢者問題への対応策を考慮する際にも極めて重要であると考えられる。中国の社会学者によって、高齢社会の社会変動論的な観点から研究成果が生み出されるようになったのは20世紀末からであり、本論文もまたこの趨勢の一翼を担っている。

金子の日本都市における高齢化研究の基本は、高齢者を支える福祉資源として高齢者のネットワークに着目するところにあるから、本論文でも同じパラダイムが採用された。なぜなら、高齢化が進む国の制度や政策の研究では、制度や政策の具体的で巨視的な比較分析を前提としつつ、制度や政策を利用する高齢者の社会参加と生活構造についての微視的な分析が不可欠であるからである。そのために日本の3都市におけるそれぞれ500人規模の質問紙法による調査結果の二次分析と、独自に実施された800

人規模の瀋陽市高齢者調査データの計量的な分析が試みられた。

主題は都市社会学における高齢者のネットワークの現状分析であり、データ解析もここに集中する。まず、「血縁」を媒介する家族と親族の関係、そして居住地域が同じであることによる「住縁」を媒介する近隣と地域の関係、職域を同一とする「職縁」による関係、さらに「関心縁」ともいうべき、同じ関心をもつ人々による集団活動を通じた友人関係に具体的な焦点が置かれ、日本の3都市と瀋陽市との比較研究が進められた。

この社会学的意義と政策科学的意義は非常に大きい。それは、近年の中国における高齢者をとりまく社会情勢の変化のなかで、高齢者の社会的ネットワークの特質として伝統的に強調されてきた家族と親族への深い依存関係が弱まり始めているからである。高齢者にとって「家族団らん」という満足感と親族への「依存関係」が次第に弱くなりつつあるのであれば、高齢者福祉を伝統的な家族中心で担うことができなくなる。その意味でも高齢期の社会的ネットワークの現状が正しく把握されて、地域福祉情報への基盤に置かれる必要がある。

比較分析の結果、瀋陽市の都市化に伴って、近隣関係は「崩壊している」とか「冷え切った」とは依然として言い難いく、社区（コミュニティ）福祉は高齢者を支える福祉資源として機能していた。

また、生きがいと社会参加の分析を通しては、瀋陽市の高齢者のライフスタイルにも、常に家族や友人それに地域住民とともに生き、それらの多くの人々とのかかわりのなかで「共生」していこうとする態度が解明された。この社会参加の行為は高齢者の生きがいと結びつき、そこから高齢者の自立のみならず、高齢者自身が地域福祉の担い手として参加する構造が明らかにされた。ことについて考察し、これからの中国の特色を持った地域福祉の創造を意識しながら

以上のように、本論文では高齢者人口の問題、高齢者問題、高齢者福祉、高齢者個人・家族の現状分析などを通して、実証的な比較社会学の観点から、高齢者に関する介護や支援の問題を超えて、全員で支えあう高齢福祉社会を創造するための基礎作業として、日本で学んできた先行研究に沿った福祉資源の機能と課題が指摘された。

これらの実証的な基礎情報が、高齢者問題に直結する社会保障制度の創造にどのように活かされるか。高齢者の社会参加と生活構造について、その中心を占める家族、地域、職場の三領域の現状を制度論との関連でも検討し、地域福祉の主体としての高齢者像を析出した本論文は、比較社会的にも今後重要な位置を占めるものと思われる。高齢者の「循環役割」の消失と「固定役割」が脆弱になっても、地域社会は依然として高齢者に開かれている。そこでのボランティアに取り結ばれる社会関係は「流動役割」を高齢者に提供し、生きがいや健康にとってプラスの機能を持つことは中日両国の都市比較研究で証明されたことの意義も大きい。

その他の研究成果としても、コミュニティを意味する社区を実証的にネットワークの

堆積と読み替えて、近隣関係や社会参加それにネットワーク論に具体的に福祉資源として接合させた点が新しい論点である。同時に個人レベルの生きがいと生活構造の分析を通して、高齢者自立への展望が述べられ、高齢者扶養だけの限界を超えた「生活の質」論への手がかりが明らかにされた。これらは今後の中日都市における高齢者福祉にとっての貴重な情報になりえるであろう。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 金 子 勇 (社会システム科学講座)

副 査 教 授 松 岡 昌 則 (社会システム科学講座)

副 査 教 授 関 孝 敏 (地域システム科学講座)

学 位 論 文 題 名

都市高齢者を支える福祉資源についての中日比較研究

— 家族福祉と地域福祉を中心として —

本論文は、中国東北部の瀋陽市における独自の質問紙調査から得られたデータの分析と、日本では金子勇が実施した千歳市、長野県諏訪市、沖縄県宜野湾市での質問紙調査の二次分析を行い、中日都市高齢者の社会参加と生活構造をテーマとした実証的研究成果のまとめである。

調査は各都市ともに60-79歳の高齢者市民を対象として、市内全域からの層化二段無作為抽出で確定した対象者への訪問面接による。この質問紙法によって収集された高齢者データの解析を主軸とし、並行して国や自治体が公表している行政資料の分析を行い、それに加えて少数ではあるが詳細なインテンシブな聞き取り調査結果を独自のデータベースとして活用した。

総合的に見れば、地域福祉社会学の主要な概念のうちコミュニティ、地域福祉、ネットワーク、福祉資源、生きがいなどを中国語と日本語の特徴を比較しながら操作概念化して、それぞれの膨大な調査結果を計量的に分析したと要約される。

本論文の序章では、本論部の目的、問題意識、全体の構成が述べられ、瀋陽市の概要が付記されている。

論述は以下の展開になっている。まず中国における高齢社会の動向が日本と対比させながら要約される。そこでは高齢社会における基礎情報である高齢者人口、高齢化の原因、一人っ子政策と少子化問題、失業問題などの現状が述べられ、家族変動としての世帯規模の変遷と婚姻の動向がまとめられた。

次いで、福祉先進都市である上海市におけるケアシステムとコミュニティサービスの実態がまとめられ、瀋陽市におけるインテンシブなデータを高齢者の社会参加、社区(コミュニティ)活動に大別して整理された。さらに高齢者扶養の問題が扱われ、伝統的な扶養意識が市場経済のなかで変質し、都市部と農村部に見られる経済格差の増大が行政の福祉サービスや地域福祉面にも反映している実態が明らかにされた。中

国の著名な社会学者である費孝通による扶養分類の「フィードバック型」（親の養育と子どもの扶養の双方向性）が依然として普遍的ではあるものの、この20年来の産業化や都市化の社会変動の結果、親の養育だけで子による扶養が存在しない「リレー型」が着実に増加してきたことが、瀋陽市におけるインテンシブな高齢者事例研究で具体的に指摘された。また日本3都市におけるデータと比較して、家族による扶養期待が瀋陽高齢者の方に強く認められる点を強調し、高齢者の自立性意識の差異と家族規範の相違さらに福祉政策の水準の違いにその原因を求める論述になっている。

本論文のオリジナルな貢献度が一番高いのは、瀋陽高齢者データの計量的成果の部分である。約700人の回答者からのデータを詳細に分析して、日本都市よりも高い同居率、男性よりも女性の同居率の高さ、階層の高さと同居率の高さの正相関などが具体的な知見とされた。しかしさらに分析条件をコントロールしていくと、重回帰分析の結果では高齢者個人所得の高さは同居促進の因子とはならず、逆の結果が得られた。個人所得では、低いほうが家族同居の促進をうながすのである。これは階層論的通説への反証としても今後さらに吟味する価値がある。

コミュニティを意味する社区における高齢者のネットワークの計量的分析では、まず都市住民管理組織である街道と居民委員会の歴史と現状が整理され、社区の現状に結び付けられた。これは現在の中国政府にとっての課題の一つである社区建設（コミュニティ・ディベロップメント）にとっても有意な知見となる。ここでは計量的手法によって、親しい友人数、別居子来訪頻度、親戚の来訪頻度、友人への訪問頻度とそして友人数などと近隣関係の親密さとに正の相関があることが立証されたからである。

生活構造をめぐる都市高齢者間の比較分析でも役割理論が用いられ、そのデータと生きがい項目とが重ねて論じられた結果、瀋陽高齢者の生きがいは、因子1が「家族交流」、因子2が「付き合い」、因子3は「趣味娯楽」、因子4は「社会参加」となっていた。日本都市高齢者に比べると、「趣味娯楽」と「社会参加」が弱く、「家族交流」が強くなったことになる。この社会参加についてはパーソナルな交流参加、職域や地域や各種団体における組織活動への参加、趣味活動参加に分けられる。

一人っ子政策のために、21世紀中国では急速な高齢社会が到来する。ここでは従来からの家族依存型の高齢者扶養は成立しがたいので、異なるパラダイムとしてコミュニティを意味する社区を実証的にネットワークの堆積と読み替えて、近隣関係や社会参加それにネットワーク論を具体的に高齢者の福祉資源論として接合させた。この点が貴重な成果であると指摘できる。同時に高齢者自立への展望が述べられ、高齢者扶養だけの限界を超えた「生活の質」論への手がかりが明らかにされた。

もちろん中国都市が瀋陽市だけであり、3つの日本都市はすべて二次的分析であるという比較研究としての素材の乏しさ、計量的分析法がまだ不十分な点、日本語の文章表現など、改善すべきところはいくつか指摘される。しかし、それらは全体として本論文の価値を低めることにはならないし、このような比較地域福祉社会学の計量研

究者が少ない中では有益な試みといえる。

以上の審査結果と入念な口頭試問結果を踏まえた審議から、本論文が、博士（文学）の学位授与にふさわしい学問的価値をもつものであるという点で、全員の意見が一致した。